

## わたしたちは決して恐れない。揺らぐことはない。

この詩編は、歌われた背景も比較的是っきりしている。ルターの「神はわが糧」はこの詩を土台にしているのだろう。歴史的背景の一つはイザヤ 36 章～37 章に描かれている。アッシリア王セナケリブ(前 706-68 年) がパレスチナに攻め込んできたときである。ツロを孤立させ、アシュケロン、テムナ、エクロンなど地中海沿岸都市を征服。これに対してユダの王ヒゼキヤはエジプトを頼り、反アッシリア政策を取ったため、セナケリブはいよいよラブ・シャケを派遣し、エルサレムに向かってきた。この時のセナケリブ碑文によればユダの町 46 を占拠し、20 万人を捕虜としたと言う。そして、エルサレム包囲中(ヒゼキヤは莫大な金銀、神殿の宝物を与えて和議を求めたが) 無条件降伏を要求した。しかし、疫病によってか、アッシリアの内紛か、エジプト軍の参戦のうわさによってか、突然セナケリブ軍は去っていった。ユダの王を支えたのが預言者イザヤであった。まあ、この救済(成功) 体験が、その後、エルサレム不落神話を生み出したのは歴史の皮肉であった。神はイスラエル中心、エルサレム中心ではなく(シオニズムの問題点)、「神」であり、神は「ことば」によって働くのである(7 節「み声」)。「アラモトで」*alāmōwt* とは「乙女たちの調べ」で、ソプラノか? 8 節と 12 節はリフレインであり、「万軍の主は私たちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔」と歌う。形式美としては、4 節後にも本来リフレインがあつてしかるべきであるが…。

以上のことを念頭において、まず、本文をできたら朗読して味わってみよう。

### 1. 神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦

敵対するものたちからの攻撃に対して「避難所」そして「砦」(*wā'ōz* 力) は、大いに助けになる。苦難に直面するとき、神はそこに共にいて(*nimsā mē'ōd*, very present)、助けてくださる (*'ezrah*)。その神に信頼するゆえに、「わたしたちは決して恐れない」。人間が立つ大地の形が変わり、地震による津波で海の中に飲み込まれても、太古の神話的表象にあるように、海の波が騒ぎ、湧きかえるときも、大浪が襲うとも、神を信頼する者たちは恐れない。「限りあるものの崩壊・世界の破局は信仰を脅かすことはできない」。(Weiser)

### 2. 大きな河(「セラ」で休止を入れて)

雨の少ない土地に生きる遊牧民や農民にとって水は命の保証であり、一つの河の多くの流れは夢であった。創世記 2 : 10-14 にはエデンの園から湧き出る 4 つの大河が描かれている。エゼキエル 47 章の幻や詩編 65 : 10 の河への憧れを参照。もっとも、エルサレムにはヒゼキヤ時代「貯水池」(イザヤ 7:3) があり、城壁内にギホンの泉(エルサレムの東側キデロンの谷にあった泉) から「シロアム」の池まで 6 キロのトンネル水道があつた(列王下 20:20、歴代下 32:30)。それまでは、山腹にそって樋によってシロアの池に繋がっていた。イザヤ 8 : 6 のゆるやかに流れるシロアの水は地下トンネル以前のものか? シロアの池は、「古い池」「上の池」(イザヤ 7:3) に対して「下の池」(イザヤ 22:9、11) と呼ばれていた。大河? とはある意味で神話的表象であろうか。難攻不落でしかも水を確保しているエルサレムを民衆は頼りにしていたが、何よりも神を頼りにすることを預言者は語ったのである。

### 3. 神はその中にいまし、神は助けをお与えになる

「神は彼女の中にいまし」、彼女(都エルサレムは女性名詞) は動かされない。神は彼女を助けられる (*ya'zārehā*, shall help her)。「夜明けと共に」。あの復活の朝のように、来る永遠の朝のように!

#### 4. この世は騒ぎ立つ

エルサレムの住民の平安に比べて、この世のすべての民は騒ぎ（憤怒する）、国々は揺らぐ。地は溶け去る。このコントラストが印象的である。「騒ぎ立つ民と揺らぐ国々」は自然界の脅威よりも脅威である。（メイズ）特に、戦争は自己破壊である。

そして、リフレインが入る。Yahweh sebā'ōwt 'immānū mišgāb- lānū 'ēlohē ya'āqōb 「万軍の主は私たちと共にいます。ヤコブの神はわたしたちの砦の塔」

#### 5. 信仰への呼びかけ

詩の次の節は信仰への呼びかけである。神の救済史を「仰ぎみよう」（うつむかず、信（仰）すること）。lākū hāzū mip'ālowt Yahweh 、Come, Behold! the works of Yahweh 「来て、見上げよ 主のなされ（る）た業を！」

主の業とは、弱きエルサレムに攻め上ってくるこの地を圧倒すること（šām šammōwt 口語訳「驚くべきこと」）を行われた、青木澄十郎「荒廃をつくり」、地の果てまで、戦いを絶ち、弓を砕き、槍を折り、盾を焼き払われること（その戦車を焼き払われる）。

10 節 「力を捨てよ」「戦いを止めよ」も良いが、用語は、汝ら「静まれ」（harpū, be still!）、そして、「知れ」（ūdā'ū）である。何を？ 「わたしこそ神であることを」神の自己顕現（'anōkī'ēlohīm）であり、「私は国々の間で高く引きあげられることを」（'ārūm baggōwym）」「この地において引き上げられることを」（'ārūm bā'ares）。こうして神礼拝と救済史が結び付けられている。

これらの歌の背後には預言者イザヤの声が聞こえる。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」（ミカ4：3）。預言者イザヤは超大国エジプトにも北のメソポタミア帝国（アッシリア、バビロニア）にも加担せず神に頼り、中立であることをユダの王に勧めた。米国ニューヨークの国連広場には、預言者イザヤ2：4 ヴァージョンの「イザヤの壁」がある。